

服飾にみる日常と芸術の接点—意匠の創案と享受

大久保尚子

(服飾美学会・宮城学院女子大学)

今日、服飾の意匠創案は専門家に委ねられているが、過去に溯れば享受者すなわち生活者の意匠への関与は身近な服飾にもみられた。江戸後期の美術や芸能、文芸の享受と一体化した意匠創案を楽しむ文化の近代に至る系譜を通し、享受者の意匠への参加、日常と芸術の接点を考える。

第一に天保期(1830-44)人情本に描かれた、町人層の享受者たちによる美術や文芸、芸能の愛好に基づく意匠創案に注目する。

江戸後期の染織遺品には絵画表現に近接した意匠が多いが、絵師の関与や注文者の意向が判明する例は稀である。一方、人情本には絵師への評価に基づく多様な趣向が描かれ、下絵依頼による誂えの他、既存作品を写す例も登場する。為永春水『春告鳥』五編(1837年以降)、「文晁先生の画を写真しやううつしにした蝶に菜の葉を糸糸で刺繡し、発句を添え」た帯の例では、「写真しやううつし」は実在する対象を再現的に写すことと解され、文晁による原画の表現を刺繡に置き換えた意匠が意図されている。発句を伴う俳諧摺物写しであり、通人たちの摺物制作、日常的な鑑賞を背景に持つ趣向と捉えられる。

書画の落款印を散らした「印尽くし」は書画会流行などを背景に広く好まれた。狩野派の印譜写し等が一般的だが、為永春水『祝井風呂時雨傘』二編(1838年)では当時人気の篆刻家の印影を写した誂え染めが注文者の「案じ」として語られる。作家と作品への精通を示す誂えである。

役者文様の大衆的流行の一方で熱心な歌舞伎愛好者には独自の捻りを加えた役者好みの意匠が求められた。『春告鳥』初編(1836年)に登場する四代三津五郎鬮貞の男の身边にはその種の意匠が点在する。気付き難い描写は鬮貞連中の頭領であった版元が絡んだ遊びでもあり、意匠の提示と読み解きが愛好者間で楽しまれたことを窺わせる。

これらの意匠の創案は書画や文芸、歌舞伎自体の享受の延長上にある。書画会、役者鬮貞連中など人々の交遊を伴う活動との繋がり、人に装われ眺められて初めて表現として完成される服飾の特性を示している。

第二に身近な木綿染織である手拭、浴衣の意匠創案を遊びとして楽しむ文化の近代に続く系譜に注目する。

天明期(1781-89)、江戸の趣味人の中で変わった趣向の手拭、浴衣意匠を案

じ実際に染めて披露する「ゆかた^{あわせ}」「手拭合^{あわせ}」が行われ、絵本となった。天明初年の『ゆかた合』には名物裂等古典意匠を俗にやつした、上層趣味人たちの雅俗融和の境地が見出され、後に流行する名物裂写しの浴衣の先駆けとも位置づけられる。山東京伝を中心に催された天明4年の『手拭合』は遊びの性格が濃厚であり、先行する京伝の見立小紋集『小紋裁』とも重なる。通常意匠とされない題材を小紋に仮託し読み解かせる『小紋裁』の意匠は虚構に属する。これを応用した『手拭合』の作品は意匠創案を遊ぶことの仲間内での広がりを示す。同時代には遊びの試みであった『小紋裁』『手拭合』の意匠も後年日常に波及する。

文久年間(1861—64)の江戸では戯作者らを中心に手拭合の会が発足、明治半ばまで継承された。配り手拭、浴衣の誂え制作は実生活での意匠創案の代表例である。特に配り手拭は個人や商店にも昭和中期まで広く行われ、遊び心のある意匠が工夫された。一方、大正末昭和初期には職業図案家によらない創作図案浴衣ブームが起こる。大正14年の雑誌『主婦之友』の図案公募を発端に雑誌新聞の企画が相次いだ。いずれも一般市民や芸術家の参加が特徴である。注染の技術的向上や芸術思潮、マスメディアの隆盛とも関わるが、享受者の意匠への参加、自由な着想の評価等の点で江戸後期以来の系譜に位置付けられよう。

享受者の芸術経験を通し創案された服飾の意匠は、装われることにより芸術を日常へと繋ぐ。書画や芸能鑑賞の経験を再現的に楽しむ意匠は着用者の身体を介し日常に浸透する。『小紋裁』や『手拭合』は身にまとわれる染織意匠を見立の拠とするからこそ虚構から現実へと越境し、日常に波及した。服飾は様々な芸術表現と接することにより、時に日常を異化する力を持つ。享受者の意匠創案への参加はその力を確かなものとすると考えられる。